

ディケンズのユーモアの言語

吉田孝夫

The Language of Humour of Dickens

Takao YOSHIDA

滋賀大学教育学部紀要、第37号に続き、ディケンズのユーモアの言語を、語呂合わせ、類音、縁語、もじり、兼用法、迂言法の観点から、実例を文脈をたどりながら考察する。

語呂合わせ〔しゃれ〕は同音異義語によることばの遊びで英文学で頻用される。青ざめた太った少年を見て、ウォードルは、'Have you been seeing any spirits?' 「君は幽霊でも見ていたのかね?」と尋ねると、かたわらのベン・アレンは、'Or taking any?' 「それともお酒でも飲んでいただのかね?」と質問の矛先を変える (*The Pickwick Papers* (以下、PP とする), 54)。「さあ、ネヴィル君、甥のネッドのために乾杯しよう。彼の足が馬の拍車にかかっている (in the stirrup) —— 比喩的な言い方だが —— ので、我々の別れの杯 (our stirrup-cup) を彼に上げよう。ネッド、元気で!」とジャスパーは言う (*The Mystery of Edwin Drood* (以下、MED とする), 8)。stirrup-cup は「(旅立つ馬上の人に勧めたぶどう酒などの) 別れの杯」。ネッドはエジプトに赴くことになっている。怠惰な紳士は最初に質問者の目 (his questioner's eye) を見、それから風目〔風の吹いてくる方向〕(the wind's) に目をこらす (*American Notes* (以下、AN とする), 1)。ジャスパーが「生石灰 (quick-lime) というものかね」と尋ねると、ダードルズは「そう! あっという間に

靴を食って融してしまうよ (quick enough to eat your boots)」と言う (MED, 12)。「絶対に」と酒の勢いを借りて元気な (pot-valiant) ポット (Pott) は答えた。酒びんのポット (pot) を人名のポット (Pott) にかけた。

'That reptile,' whispered Pott, catching Mr. Pickwick by the arm, and pointing towards the stranger. 'That reptile Slurk, of the Independent!'

'Perhaps we had better retire,' whispered Mr. Pickwick.

'Never, sir,' rejoined Pott, pot-valiant in a double sense, 'never.' With these words, Mr. Pott took up his position on an opposite settle, and selecting one from a little bundle of newspapers, began to read against his enemy. (PP, 51)

「馬を思いどおりに走らせろ (Give her her head)、トム」と主人は叫ぶ。「やつらはどのくらい先に (a-head) 行ったのだ?」『青獅子旅館』の戸口に着いた時、ウォードルは叫んだ (*Ibid.*, 9)。次例は a Miss (未婚) と a Miss (i. e. amiss)(異常な)。ウォードルは妹 (オールド・ミス) はまだ結婚していないが、何もおかしいところはない、とふざける。

'Well, and how are you, sir?' said the stout gentleman [Wardle], addressing Mr. Snodgrass with paternal anxiety. 'Charming, eh? Well,

that's right — that's right. And how are you, sir (to Mr. Winkle)? Well, I am glad to hear you say you are well; very glad I am, to be sure. My daughters, gentlemen — my gals these are; and that's my sister, Miss Rachael Wardle. She's a Miss, she is; and yet she an't a Miss — eh, sir, eh?' And the stout gentleman playfully inserted his elbow between the ribs of Mr. Pickwick, and laughed very heartily. (*Ibid.*, 4)

グルージャスの書記、バザードはグルージャスの呼掛けにいつも「分かっています」('I follow you.')と応じる。グルージャスを訪ねたエドウィン・ドルードがおいとまする時、バザードは例によって、「分かっています」とばかり、彼を見送った('followed' him) (*MED*, 11)。「それから文通していますね (correspond)」と後見人のグルージャスがローザに言うと、「私たちはお互いに手紙は出し合っています (write to one another)」とローザは手紙の上でのけんかを思い出して、不機嫌に言った (*Ibid.*, 9)。correspond には「うまくゆく」という意味もある。「あなたは無礼にも私に — (you dare propose to me to —)」とローザが言うと、「可愛い人、私は無礼にもあなたに求婚しているのです (I dare propose to you)」とジョン・ジャスパーは応じる (*Ibid.*, 19)。「ここは法が公平に行われる国です」サムは言った。「他人を逮捕する (commits other people) 倍も言質を与え〔自分の無能をさらけ出さ〕 (commit himself) ない治安判事はいませんよ」 (*PP*, 25)。地雷が爆発する (had gone off) と、軍人と一行も例にならって、立ち去った (went off)。

There was a great fizzing and banging of guns, and starting of ladies — and then a mine was sprung, to the gratification of everybody — and when the mine had gone off, the military and the company followed its example, and went off too. (*Ibid.*, 4)

同じ動詞に異なった目的語をとらせる。ベン・アレン氏とボブ・ソーヤー氏は店の背後の小さな薬局と一緒に坐り、細切れの子牛肉を賞味し将来の見通しについて語り合っていた

(discussing minced veal and future prospects) (*PP*, 48)。discuss は「賞味する」の意味がある。皆は陰気に黙りこくって急いで食事を終えると (having bolted his food)、同じように急いで退出する (bolts himself) (*AN*, 11)。トゥインクルトン先生は自分自身と子牛パイをピクニックに貢献した〔子牛パイを持ってピクニックに出かけた〕 (has contributed herself and a veal pie to a picnic) (*MED*, 19)。見張り番はワインをとり〔飲み〕 (took the wine)、ファイアブランドは縄をとった (took the rope) (*A Child's History of England* (以下, *CHE* とする), 10)。スマングル氏は同時に支払いの約束をしながら、紳士をだました (had 'done' a bill and a gentleman) (*PP*, 41)。マーチン氏の顔はひどくけいれんし、微笑すると同時に激しい言葉を口にした (gave vent to a smile and an oath) (*Ibid.*, 48)。

動詞に異なった副詞または前置詞を付加させる。ナサニエル・ピプキンは害がなくて、人がよく、そりくりかえった鼻 (a turned-up nose) をし、相当な X 脚 (turned-in legs) だった。やぶにらみ (a cast in his eye) で、歩く時にびっこ (a halt in his gait) を引いた (*PP*, 17)。トムキンズ女学寮長は意識を回復し、階下へ連れてこられたので (having been brought to, and brought down), 話し合いがはじまった (*Ibid.*, 16)。「ピクウィック氏はさわぎに圧倒される (put down) ことにがまんし (put up) ないだろう」 (*Ibid.*, 1)。不幸なグラマーは告訴事実を再び述べはじめたが、ジンクス氏が彼の言葉を書きとめたり (taking down his words)、治安判事がそれを取り上げたり〔その真偽をたしかめたり〕 (taking them up)、生まれながらだだら話す癖、ひどい狼狽で、3分もたたないうちに、すっかり混乱して矛盾したことを言い出したので、ナブキンズ氏はすぐに、彼の言うことは信用できないと断言した (*Ibid.*, 25)。子供たちは学校に行きたがらなかったが、オレンジ夫人は彼らに旅支度をさせ (packed up their boxes)、彼らを送り出した (packed them off) ("Holiday Romance" (6), *Reprinted Pieces*)。御者は、いきなり緑のドアの家に止ま (pull up at the house) ろうとして、

ぐっと馬を止めた (had pulled the horse up) ので、あやうく馬車の中に落ちこみそうになるくらいのけぞった (pulled him backward into the cabriolet) (PP, 46)。「可哀想なクワンコー——回復しませんでした——私のために〔私をアウトにしよう〕 (on my account) (クリケットのボールを) 投げ続け (bowled on)、—— 彼のために〔投手として〕 (on his own) 投げ死んだ (bowled off)』とジングルは言う (Ibid., 7)。イータンスウィル・ギャゼット紙上で本の酷評をしている若い紳士を出し抜いた (having cut out the young gentleman who cut up the books for the Eatanswill Gazette) スノッドグラス氏は詩をたしなんでいる若い婦人を相手に熱弁をふるっていた (Ibid., 15)。

同じ形容詞が異質の前置詞句にかかった場合である。tall が文字通りの意味と比喩的な意味で用いられた。背の高い男と未亡人の間で交わされるちょっとした愛情のこもったなれなれしさは、背の高い男が彼女に背が高いばかりでなく好意を持たれている (the tall man was as high in favour as he was in size) ことを十分に示していた (PP, 14)。

派生語を用いたり、品詞を置きかえた語呂遊びがある。「辛辣な言葉を吐けば私が深く傷つけられる (sharp-edged words have sharp edges to wound me) ことくらい分かったはずです」とネヴィル・ランドレスが言う (MED, 8)。「弾に当たるも当たらぬもみな運命」 ('every bullet has its billet.') という確立した諺がある。もしそれが同じように射撃に適用されると、ウィンクル氏の撃った弾は生来の権利を奪われて世の中に放り出され、どこにも宿ら〔当たら〕 (billeted) ない不幸な捨て子だった。

It is an established axiom, that 'every bullet has its billet.' If it apply in an equal degree to shot, those of Mr. Winkle were unfortunate foundlings, deprived of their natural rights, cast loose upon the world, and billeted nowhere. (PP, 19)

同一語の反復は不思議と滑稽味がある。動詞、副詞、前置詞の例をそれぞれ示そう。

...; and I have no doubt I might have gone in, and gone to bed, and gone dead, and nobody a

bit the wiser. ("Genoa and Its Neighbourhood," *Pictures from Italy*)

So Tackleton went to Tilly Slowboy's relief; and he too kicked and knocked; and he too failed to get the least reply. But he thought of trying the handle of the door; and as it opened easily, he peeped in, looked in, went in, and soon came running out again. (*The Cricket on the Hearth* (以下、CH とする), 3)

..., he was soon starved into an apology, and into a treaty of peace, and into paying the expenses of the war. (CHE, 16)

言葉の対比による笑いがある。トニー・ウェラー氏は小声で、奴〔スティギンズ〕は外はシモン聖人 (Saint Simon Without) の連合教区の代表者、内はウォーカー聖人 (Saint Walker Within) にちがいない、と言った (PP, 45)。シモンは使徒ペテロの本名。ウォーカーは Hookey Walker のこと。Hookey Walker! [Walker!] は疑いを示す間投詞で「ばかな!」。ここではベテン師の意味。スティギンズは外と内が異なる偽善者である。老ロップスは大きな鍵穴 (the big key-hole) のついた小さな金庫 (the little iron safe) に数えきれない無尽蔵の宝をしまっているとうわさされていた (Ibid., 17)。右の親指で左の肩越しに (with his right thumb over his left shoulder) うしろを指して、「それとは逆だ」 ('over the left') ということを示す。

'I really am so wholly ignorant of the rules of this place,' returned Mr. Pickwick, 'that I do not yet comprehend you. Can (原文、イタリック) I live anywhere else? I thought I could not.'

At this inquiry Mr. Martin looked, with a countenance of excessive surprise, at his two friends, and then each gentleman pointed with his right thumb over his left shoulder. This action, imperfectly described in words by the very feeble term of 'over the left,' when performed by any number of ladies or gentlemen who are accustomed to act in unison, has a very graceful and airy effect; its expression is one of light and playful sarcasm. (Ibid., 42)

類音による言いちがい、聞きちがいがある。この傾向は一般に無教育の登場人物に見られ、喜劇的效果を出す。ウェラー親子の愉快的セリフを聞いてみよう。「ありがとう、サミュエル、ここに快活 (a cheer) (i. e. a chair) があるよ」と御者のトニー・ウェラーは椅子を引っぱり出しながら言った (PP, 56)。彼は弁護士事務所 (Counsel's Office) をコンソル公債事務所 (Consol's Office) (*Ibid.*, 55)、従順な (conformable) を気持のよい (comfortable) (*Ibid.*, 56) のつもりで用いる。彼は考えこんで火を見つめながら答えた。「おれは審判をして〔物思いにふけて〕 (in a referee) [i. e. in a reverie] いたのだ」(*Ibid.*, 52)。ウェラーは息子のサムへの手紙の結びに eternally yours 「永遠に汝のもの、敬具」のつもりで、infernally yours 「のろわれた汝のもの」と書く (*Ibid.*, 52)。「『親愛なるメアリーよ、君の恋人として僕を除外し〔受け入れ〕 (Except of me) [i. e. Accept me]、僕の言ったことを考えておくれ——親愛なるメアリーよ、これで手紙を終わりにしよう』これだけです」とサムは言った (*Ibid.*, 33)。「あなたは私に半ギニー除外して〔受けとって〕 (except of half a guinea) [i. e. accept half a guinea] ほしいと願っておられる」とサムは口をはさんだ (*Ibid.*, 10)。「あの機械と2人の可愛い子を行列させて〔持つて〕 (in the procession (i. e. possession) o' that ere ingine and two more lovely hinfants besides)、実にひどい意地悪な女房さえいなかったら、彼はとても幸福な男だったでしょう」とサムは言う (*Ibid.*, 31)。「あばよ ('A-do)、サミュエル」と老紳士〔トニー・ウェラー〕が言うと、サミーは「どんな騒ぎ ('Wot's a-do?)」と尋ねる (*Ibid.*, 45)。トニー・ウェラーは A-do を気取ってフランス語の adieu 「ごきげんよう」のつもりで用いたが、息子のサムは A-do を ado 「騒ぎ、面倒」と聞いた。「彼の仕事? 聖歌隊 (choir) で歌っているよ」のダチェリーの答えに、やつれた女は、「尖塔 (spire) で?」と問い返す (*MED*, 23)。

頭韻、脚韻による笑いもある。この短い話の間に2、3度、智天使 (cherub) 〔ウィルファー〕は椅子の方に丸ぼちゃの (chubby) 動きをし

た (*Our Mutual Friend*, I, 4)。次例の頭韻は人名の Reginald につけられた修飾語である。

He was shy, and unwilling to own to the name of Reginald, as being too aspiring and self-assertive a name. In his signature he used only the initial R., and imparted what it really stood for, to none but chosen friends, under the seal of confidence. Out of this, the facetious habit had arisen in the neighbourhood surrounding Mincing Lane of making Christian names for him of adjectives and participles beginning with R. Some of these were more or less appropriate: as Rusty, Retiring, Ruddy, Round, Ripe, Ridiculous, Ruminative; others derived their point from their want of application: as Raging, Rattling, Roaring, Raffish. (*Ibid.*)

クリスパークルが答えた。「君のかつての後見人は——実に分らず屋だ。彼がへそを曲げていようと (*adverse*)、つむじを曲げていようと (*perverse*)、首が曲らなくなっていようと (*reverse*)、道理の分かる人にとっては、どうでもいいことだ」(*MED*, 17)。クリークル校長は、メル先生が学校を去るようになった時、トミー・トラドルズが万歳 (cheers) しないで、泣いて (tears) いたのを知って、彼をむち打った (*David Copperfield* (以下、DC とする), 7)。私〔デイヴィッド〕はゲームが下手 (awkward) で、勉強が遅れて (backward) いた (*Ibid.*, 16)。サム・ウェラーは手紙に「君を恋い焦がれるピクウィックより」('Your love-sick Pickwick') と署名した (PP, 33)。

縁語はある語と意味上の関連を持つ語で、戯れの状況で用いられる。「私の生活の耐えがたい単調さが、私をじりじり摩滅させるのだ (grinds me away by the grain)」と身を粉にして働く音楽家 (grinder of music) のジャスパーは言う (*MED*, 2)。grind grain 「穀物をひく」という言い回しがある。ブリテン夫人はポケットに手をつっこみ、薄い本とくしゃくしゃの紙の大きなかさ〔かたまり〕: まさに群をなす犬の耳 (a very kennel of dogs'-ears) を引き出した (*The Battle of Life* (以下、BL とする), 3)。dog's-ear は「本のページのすみの折

れ」。kennel は「(狐犬などの)群」で dog と縁語である。次例は Chelsea water-works 「チェルシーの浄水所」と melting 「めそめそ泣く」が縁語になる。waterworks は俗語で「涙(の源泉)」の意味がある。

'Wot's the matter vith the man,' said Sam, indignantly. 'Chelsea water-works is nothin' to you. What are you melting vith now? The consciousness o' willainy?' (PP, 23)

もじりはもとの表現をかえて滑稽にしたものである。ピクウィック氏はこう言いながら、ピーター・マグナス氏を百科大辞典的な重々しいまなざしで見た (looked encyclopaedias at Mr. Peter Magnus) (PP, 24)。look daggers 「(人)にらみつける」という言い回しがある。「火を起こせ。そしてもう一つの i に点を打つ前に [すぐに] (before you dot another i)、石炭入れをもう一つ買って来てくれ、ボブ・クラチット!」とスクルージは言った (A Christmas Carol, 5)。遅れて出社したボブは時間に追いつこうとするかのように、ベンを走らせていたのである。before you can say Jack Robinson 「あっという間に」がある。下宿探しにやってきたグルージャスがピリキン夫人に「3階も見せていただけますか」と尋ねると、彼女は「結構でございます。ガラス張りでございますから (it is open as the day)」と答える (MED, 22)。「as honest as the day」という直喩や 'It is as clear as the day.' という諺がある⁽¹¹⁾。テムズ川を明るくはしなくても、世間を啓発するような (would have enlightened the world, if not the Thames) 言葉を、ピクウィック氏は今にも言おうとしたと推測されるが、このようにして彼は言葉をさえぎられた (PP, 3)。set the Thames on fire 「世間をあっと言わせる」という成句がある。「真の恋の道は鉄道ではない (the Course of True Love is not a Railway) ことを強く示す」は PP の第 8 章の小見出しである。W. Shakespeare の A Midsummer Night's Dream, I, i, 134 に The course of true love never did run smooth. がある。「それ以来、私は夕べの会話を索漠とした空気に浪費したのです [無駄に交わしたのです] (I have been since,

as I say, wasting my evening conversation on the desert air.)」とサブシーは言う (MED, 4)。英国の詩人、Gray (1716-71) の 'Elegy Written in a Country Churchyard' (55-6) に Full many a flower is born to blush unseen, And waste its sweetness on the desert air.⁽¹²⁾ がある。

ディケンズの言語によせる旺盛な関心は、彼に既存の表現に満足させず、臨機応変の言葉を生み出させた。ディケンズの造語のいくつかを紹介しよう。unruffable composure 「平静な落ち着き」(PP, 33)、the metal-visaged Mr. Martin 「無表情なかない顔をしたマーティン氏」(Ibid., 48) がある。unruffable は OED ではディケンズが唯一の引用例である。サム・ウェラーは身体の小さな少年に向かって、Small-cheek 「ちびさん」と言う (Ibid., 19)。次例は pussy⁽¹³⁾ 「女の子」が「猫可愛がりする」という動詞の臨時語として用いられた。

'Never you mind me, Master Edwin,' retorts the Verger's wife; 'I can take care of myself.'

'You can't. you're much too handsome. Give me a kiss because it's Pussy's birthday.'

'I'd Pussy you, young man, if I was Pussy, as you call her,' Mrs. Tope blushing retorts, after being saluted. (MED, 2)

御者のトニー・ウェラーは彼特有の愉快的表現をする。彼は「いつ彼の審理が始まるのかね (Ven do you take his cloths off?)」と尋ねる (PP, 43)。馬車が出発する時、馬にかけてある馬衣 (cloths) を取りはずすことからこのように言った。「そのうちの 1 人はほっそりして背が高く、髪の毛が長く、すごいおしゃべり (the gift o' the gab wery gallopin') じゃないかね?」と彼は尋ねた (Ibid., 20)。gab galloping 「おしゃべり (という馬が) 疾走する」。彼はまた「最初の夫」を「最初の投機の対象」(your mother-in-law's first wenter (i. e. venture)) と言う (Ibid., 45)。彼の息子のサムはピクウィックに、「判断力が鈍る」ことを「判断力が訪問のために外出する (your judgment goes out a wisitin')」と表現する (Ibid., 22)。

言葉を文字通りの意味と比喩的意味で用いる兼用法がある。ジャスパーはピアノに向かって、サブシーの耳をくすぐる〔喜ばす〕歌を歌った——比喩的に言うと、彼の耳は大変長かったので、相当くすぐらなくてはいけなかった (sang to him [Sapsea], tickling his ears — figuratively — long enough to present a considerable area for tickling) (MED, 12)。耳の長い口バは、イソップでしばしば愚か者で登場する。「彼は巡査と張り合って、それに勝ったのです」('he run a match agin the constable, and vun it. ') とサムは答えた。outrun [overrun] the constable 「借金をする」という慣用句がある。「借金した」ことをおどけて言ったのである。

'But what did he do?'

'Wy, he did wot many men as has been much better know'd has done in their time, sir,' replied Sam, 'he run a match agin the constable, and vun it.'

'In other words, I suppose,' said Mr. Pickwick, 'he got into debt.'

'Just that, sir,' replied Sam, 'and in course o' time he come here in consekens.' (PP, 41)

食後に、ケイレブは「泡立つ大杯」の歌を歌った。たしかに (As I'm a living man) (私は1, 2年は生きていたいのだが)、彼はそれを最後まで歌い通した。as sure as I [you] live 「たしかに」という慣用句がある⁽⁴⁾。

After dinner, Caleb sang the song about the Sparkling Bowl. As I'm a living man, hoping to keep so, for a year or two, he sang it through. (CH, 3)

次例は kill time 「時間をつぶす」を文字通り「時間を殺す」ととった。

Another, a Kentucky farmer, six-feet-six in height, with his hat on, and his hands under his coat-tails, who leaned against the wall and kicked the floor with his heel, as though he had Time's head under his shoe, and were literally "killing" him. (AN, 8)

科学的な学識を持った初老の紳士が書斎に坐り、哲学的な論文を書きながら、時々、かたわらの重々しい瓶からクラレット酒で彼の身体と

労働を湿らせていた (moistening his clay and his labours)。moisten [wet] one's clay は(戯言)で、「酒を一杯ひっかける」。初老の紳士はクラレットを一杯ひっかけては仕事の疲れをいやしていたのである。

While these things were going on in the open air, an elderly gentleman of scientific attainments was seated in his library, two or three houses off, writing a philosophical treatise, and ever and anon moistening his clay and his labours with a glass of claret from a venerable-looking bottle which stood by his side. In the agonies of composition, the elderly gentleman looked sometimes at the carpet, sometimes at the ceiling, and sometimes at the wall; and when neither carpet, ceiling, nor wall, afforded the requisite degree of inspiration, he looked out of the window. (PP, 39)

ブリテン氏の妻 (Mr. Britain's better half) はすっかり彼の大部分 (his better half) になっているようだったので、彼の残りのわずか (his own moiety of himself) は彼女なしでは無力だった。

Mr. Britain's better half seemed to be by so very much his better half, that his own moiety of himself was utterly cast away and helpless without her. (BL, 3)

日常の平凡な事象をもってまわった仰々しい表現をするのはディケンズの特徴で、表現のずれからくるおかしみがある。牧師〔スティギンズ〕は褐色のハンカチを引き出し、それを光学 (his optics) に当てた (PP, 52)。目 (eyes) の代わりに光学 (optics) という硬質な単語を用いた。スノッドグラス氏は、沐浴を終えると (having concluded his ablutions)、背を炉に向けて、実に満足げにチェリーブランデーをすすりながら、部屋を見渡した (Ibid., 5)。手を洗うことを沐浴 (ablutions) と大げさに言った。ablution は宗教的儀式で、式の前後に手などを洗い清めること。グルージャスは火事 (fire) を (もの) を破壊させる要素 (devouring element) と表現する (MED, 20)。ジャスパー、ダードルズ、デピュティの一行は歩き続ける。

デビュティは行進のしんがりを務め、散開隊形をとる (as a rear rank one, taking open order)。a rear rank one, taking open order は軍事用語である⁽⁵⁾。

'He [Deputy] still keeps behind us,' repeats Jasper, looking over his shoulder; 'is he to follow us?'

'We can't help going round by the Travellers' Twopenny, if we go the short way, which is the back way,' Durdles answers, 'and we'll drop him there.'

So they go on; Deputy, as a rear rank one, taking open order, and invading the silence of the hour and place by stoning every wall, post, pillar, and other inanimate object, by the deserted way. (*Ibid.*, 5)

ヴィクトリア朝では身体の一部を口にしたり、性に関するあからさまな描写はご法度であった。トゥインクルトン先生はクリスマス休暇を前にした女生徒に、「…私達の「胸」('bosoms')に…」と言いかけて「心」('hearts')にと言ひ直す (*MED*, 13)。ドーラ・コパーフィールドの懐妊失敗は、「一瞬、魂が小さな牢獄の入口で羽ばたいたが、それは囚われの状態を知ることなしに、飛び去ってしまった」と婉曲的に表現される。

But, as that year wore on, Dora was not strong. I had hoped that lighter hands than mine would help to mould her character, and that a baby-smile upon her breast might change my child-wife to a woman. It was not to be. The spirit fluttered for a moment on the threshold of its little prison, and, unconscious of captivity, took wing. (*DC*, 48)

死や破産は単刀直入な言い方をさけた婉曲表現がなされる。弁護士のスニッチィは同業のクラッグズの死を法律用語を変形して 'was struck off the roll of life' 「人生の名簿から削除された」と表現する (*BL*, 3)。be struck off the rolls 「(英) (不正行為などのために) 弁護士名簿から名を削られる」という言い回しがある。御者のトニー・ウェラーは息子のサムへの手紙で、妻の訃報を、「おまえの義母は最後の

通行税を払った (paid the last pike)」と書く (*PP*, 52)。以前、官報に載った〔破産した〕 (passed through the Gazette) ボブ・ソーヤー氏はベンジャミン・アレン氏と一緒にベンガルに渡った (*Ibid.*, 57)。官報 (gazette) には任命・破産などのリストを載せる。

注

- (1) Wendy S. Jacobson, *The Companion to The Mystery of Edwin Drood*, P. 170.
- (2) *Ibid.*, P. 64.
- (3) **Pussy** sb. 3. Applied to a girl or woman. (*OED*)
- (4) Cf. 'He said that Christmas was a humbug, as I live!' (Fred, *A Christmas Carol*, 3) / 'Let me see you ride a donkey over my (原文, イタリック) green again, and as sure as you have a head upon your shoulders, I'll knock your bonnet off, and tread upon it!' (Miss Betsey, *David Copperfield*, 14) / 'He'll put you down as sure as ever you were born.' (Trotty, *The Chimes*, 2)
- (5) Military terms: the rear ranks are the men at the back of the army or camp; and open order is the formation in which individual men are set three or more yards apart. (Wendy S. Jacobson, *op. cit.*, P. 74.)

参考文献

- Apte, M. L. *Humour and Laughter*. Cornell University Press. 1985.
- Brook, G. L. *The Language of Dickens*. Andre Deutsch. 1970.
- Cotsell, M. *The Companion to Our Mutual Friend*. Allen & Unwin. 1986.
- Jacobson, W. S. *The Companion to The Mystery of Edwin Drood*. Allen & Unwin. 1986.
- Kincaid, J. R. *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. O. U. P. 1971.
- 中西敏一・亀井規子・青木健編『ビクウィック読本』東京図書. 1987.
- Nash, W. *The Language of Humour*. Longman. 1985.